

月の出を待つ平安京最後の天皇、

孝明天皇の遺勅と救世主 出口王仁三郎聖師

世界統一の神業 時代と舞台編

大阪中央分苑 出口 恒

本月号掲載の佐藤紋次郎口述「たまほこのひ可里」は、孝明天皇が天皇旗、錦の御旗」を睦仁親王や有栖川宮熾仁親王でなく、力士旭形龜太郎に託したという奇妙な伝説から成り立っています。明治天皇の即位式には錦の御旗はなく、有栖川宮熾仁親王が掲げた錦の御旗も孝明天皇の御旗ではなかった。

そして八紘一宇の数表と、皇国の神術である切り紙神示、遺勅さえ孝明天皇は力士旭形龜太郎に托しました。「皇紀二千六百年 千九百四十年」、その年に

物語』六十四卷上巻十五章に示す日出国と常世の国の戦争の実現と考えます。

そして日米は戦い、日本は一九四五年八月十五日に敗戦を迎えました。神は型としての日本を外国に叩き潰させることで「日本及び世界の立替え立直し」を選んだのか。

こうならぬとこの神は世に出られぬ。今日はお祝いだからご飯たべてゆきな（昭和二十年八月十五日夕刻）「八月十五日（終戦）」『新月の光』下巻）。

生誕祭が済んだら変わっていくぞ 昭和二十年八月上旬。昭和二十年の聖師の生誕祭は八月十九日 旧七月十二日）なりし。八月十五日（旧七月八日）は日本は無条件降伏の日。大本の神集祭神庭会議旧七月六日 八月十三日）に入った第三日目である（「生誕祭が変わり目」『新月

の光』下巻）。

旧七月六日の晩より七月十二日にわたり、綾部の本宮坪の内にて行はれる祭典は最も大切なる神事にて、この一週間は、御三体の大神様を初め奉り、八百万の神々様が御集會なされて、一年中における世界の経綸をお定めになるのである。即ち地上の規則を地の高天原でお定めなさるのであるから、謹み慎んで人民の願ひ事など決して、してはならないのである（「神庭会議」『玉鏡』）。

千九百四十五年八月十五日の日本の敗戦は、天の御三体の大神様たちがご集會されて決定された世界の経綸の実現でした。御三体の大神様は、孝明天皇の遺勅による願ひを、遺勅の受け取りを遅らすことで、日本をあげて敗戦に導いた。日本の敗戦がアジア、アフリカ諸国を独立

させ、世界は国際連合などにより統一へ向けて進み始めた。マッカーサーなどの英雄たちは、聖師のスリ鉢の中の味噌であり、世界はスリコギをまわしているものが誰か最後まで知らなかった。これは聖師の「世界統一の神業」が完成に近づいたことを示すものと私は考えます。なお、本文は、『照日の影』発行者旭形藤女に収められている。正八位旭形龜太郎小伝』吉田五郎著を一部参照しています。

『たまほこのひ可里』の時代は幕末から日米終戦頃まで。この文書で、「玉梓の神」とは孝明天皇を示しますから、「孝明天皇の光」を示すのでしょうか。口述者は人力車夫の佐藤紋次郎ですが、その内容の正確性は、証拠によって支えられています。

一八五八年（安政五年）四月二十三日、彦根藩主・井伊直弼

が大老職に就任し、七月に將軍・家定が薨去、安政大獄が開始されます。第十四代將軍に家茂が就任します。一八六十年（万延元年）三月三日、桜田門外の変が起り、井伊大老が暗殺されます。孝明天皇は将来の攘夷に期待して、侍従である岩倉具視らの献策を受け入れ、有栖川宮熾仁の婚約者である和宮親子内親王の徳川家茂將軍への降嫁を文久二年（一八六二年）に受け入れました。

一八六二年七月六日、長州藩が尊皇攘夷に鞍替えし、慶喜をあてにして倒幕路線を進み出します。攘夷熱が高まる中、幕府は朝廷より攘夷期限を迫られ、文久三年（一八六三年）五月十日を攘夷の期限と決定。幕府に攘夷を迫った朝廷をあおりたてていたのは長州藩士達でした。

旭形龜太郎の長州力士隊入隊
長州藩はこの日より馬関 下関)において、米・仏・蘭艦を砲撃開始（攘夷実行）。七月二日、薩摩藩が薩英戦争に敗北し、開国に路線転換。高杉晋作が奇兵隊を結成します。この奇兵隊に伊藤博文を隊長とする力士隊が参加します。力士隊は第二奇兵隊に所属し、屯所を大室山に置きました。これが大室寅吉（寅之佑）の奇兵隊入隊の伏線となります。「たまほこのひ可里」の主人公、旭形龜太郎は、小伝では、勤王攘夷の論議紛々たるに当たり、長州藩力士隊を組織す。君はその隊伍に加わり、朝日形（旭形）と称し隊長の命を奉じて京師に出張し、大いに奔走す。蓋し君か公務に服するの端緒にしてまた力士の名を冠したるの起首とする」とし

ています。旭形龜太郎が力士の名前を名乗ったのはこれが初めてでした。旭形が正確に力士隊にいつ参加または組織したかは記載がありません。

大室家のある田布施町の二キ口北の石城山には、第二騎兵隊の屯所が置かれており、力士隊の隊長はそこから毎日のように、大室家に来ていました。寅之佑も相撲が好きで、伊藤博文や奇兵隊の若い連中と相撲や乗馬に明け暮れ、軍事訓練を受けていました。第二奇兵隊の名称ができた石城山が本営となったのは一八六五年です。

大室寅之佑の出生日は嘉永三年（一八五十年）庚戌年一月十日、旭形龜太郎の生年は天保十三年（一八四二年）壬寅年、三月二十五日です。勤王の志が厚く、長州力士隊の隊伍に加わった旭形龜太郎ですから、旭

形亀太郎は、あるいはいつかの時点で伊藤博文や大室寅之佑とは相撲仲間だった可能性があり
ます。

旭形の相撲取りになった動機は、尊皇攘夷の志士として、有栖川宮家や勤王の志士たちとの間を、怪しまれず結びつけることでした。明治維新前、力士たちは、各藩大名の庇護を受けていたのですが、旭形亀太郎の名前は、大阪方相撲番付にその年三十三歳で明治七年一八七四年七月に西前頭七枚目に筆書きされており、二十代の頃の旭形は、土俵には上がっていません。力士として、かつたとしても、力士として、かつた強かつたのではないかと考えます。

慶応三年七月十九日の中山忠能日記では、明治天皇を奇兵隊の天皇」と記しています。中山忠能とは、睦仁親王の祖父

にあたります。

明治維新の果てしない闇と

旭形亀太郎

旭形亀太郎は、幕末維新前後において、公卿と維新の志士たちを相互に結びつけ、密議を通して明治維新を成功に導いた、知られざる維新の志士、功労者です。そして、維新の三傑、十傑といわれた志士たちの多くは、暗殺、刑死、病死などで明治十一年までにほぼ死に絶えてしまいました。これが明治維新裏面史なのです。

維新を迎えることができずに慶応三年一八六七年に暗殺された、薩長連合の立役者坂本龍馬は維新の十傑に入りませんが、維新の三傑、西郷隆盛は明治十年、西南戦争敗戦により割腹自殺、大久保利通は明治十一年に暗殺され、桂

小五郎、別名木戸孝允は明治十年に病死します。残りの維新の七傑のうち、大村益次郎は明治二年暗殺、広沢真臣は明治四年暗殺、横井小楠は明治二年に暗殺、小松帯刀は明治三年病死します。そのように旭形亀太郎と密儀を持ったこれらの維新の志士たちは、暗殺か割腹自殺、あるいは若くして病死しています。維新の十傑で、旭形亀太郎との親交が確認されていない江藤新平は、明治七年に処刑、前原誠は明治九年に処刑されています。

十傑の中で旭形と密儀を持った公家の岩倉具視だけが、明治十六年病死（享年満五十七歳）と長命を保ちました。そして岩倉具視と伊藤博文の二人が孝明天皇暗殺の疑惑を持たれており、初代総理大臣と

なつた伊藤博文は、朝鮮総督時代の明治四十二年、「伊藤が孝明天皇を弑逆した」という朝鮮人安重根の恨みから、ハルビン駅頭で暗殺されます。韓国の壮士、安重根がその斬奸状の中で伊藤博文の罪状十五箇条を上げていますが、その第一に「一八六八年、明治天皇陛下父太皇帝陛下（孝明天皇）大逆道之事」と記しています。もともと伊藤博文には三発の銃弾が命中し安重根の弾丸は外れ、ロシア特務機関の影響下にある組織の銃弾が二発、伊藤の体内に残っていたことが明らかになりました。伊藤が日英同盟を結んで、その結果、日露戦争でロシアを敗北に導いたことをロシア特務機関が恨み、起こした犯行との説があります（「歴史通」二千十年七月）安重根は犯人

ではない』若狭和朋著)。

徳川家茂暗殺疑惑、孝明天皇弑逆疑惑、睦仁親王暗殺疑惑と、明治維新の闇は果てしなく深いのですが、その明治維新で、尊皇攘夷倒幕の急先鋒と思われていた、出口王仁三郎聖師の実父有栖川宮熾仁親王や、岩倉具視など公卿を

維新の志士と結びつけ、明治維新を成功に導いた密使が旭形亀太郎なのです。そして同じく、維新の志士密使に聖師の恋人、八木弁の父であり冠句の師匠、度偏屈烏峰こと八木清之助がいます。

二人を頼り、二人をよく知



図一 韓国の壮士
安重根

る維新の志士たちは、はからずも明治十一年までに、ほとんど暗殺され、処刑され、割腹自殺に追いやられました。それを明かす人がいなかったため、二人の功績が現代まで語り継がれることはありませんでした。

孝明天皇は、出口なお開祖を「みろくの大神」としました。旭形亀太郎は孝明天皇のために御神名「玉銚の神」を開祖より受け、死してなお、弟子の人力車夫佐藤紋次郎を通して、月の出、出口王仁三郎聖師を待ち続けました。八木清之助は、有栖川宮熾仁親王の元



図二 初代総理大臣
伊藤博文

婚約者と宮親子内親王の江戸行きに同行し、その切り落とされた左手首を千代川村拜田の裏山に祭るなど、内親王の生と死に大きく関わりました。

正八位旭形亀太郎の尊皇の志
三年 一八四二 壬寅年、三月二十五日、大阪島之内大宝寺町中の町に生れました。本名は速水亀太郎、父を速水清兵衛と称し、旭形はその次男で祖父は元老付北面の武士。北面の武士とは院御所の北面を詰所とし、上皇の側にあって身辺の警護・御幸に供奉し



図三 公卿 岩倉具視

た官人らを言い、御所の警備隊を意味しましたが、禁門の変においても全く登場する事がなく、家柄を表す名目として明治維新まで存続しました。清兵衛が若くて意気盛んな頃、理由があつて旭形は大阪に移

住します。旭形は祖父母にとりわけ大事にされ、深く愛情を注がれたといえます。清兵衛は常に知らないものを教え諭すのに、常に尊皇の義、すなわち武力(霸道)をもって支配する「覇」(覇者)に対し、徳(王道)をもって支配する「王」(王者)を尊ぶことを説きました。天皇を「王」、武家政權幕府)を「覇」とみなしたので

しょう。そして旭形が終始一環して尊皇の志を持ったのは、幼児からの清兵衛の教えの影響によるものでしょう。旭形は親に孝行を尽くし、その意

に逆らわない天賦の性質を有していました。嘉永二年（一八四九年）（九歳）、その孝順が顕著であることを町奉行に讃えられ、青銅三貫文を賞與されています。

嘉永五年（十一歳）、祖母の訓誨によりて徳島藩士津山数馬の門に入りました。十五歳で剣術と柔道の両技で免状を受けています。

有栖川宮家付きの密使、

八木清之助

なお弘化四年（一八四六年）、現亀岡市の千代川町拜田村に、出口王仁三郎聖師の青年時代の恋人、八木弁の父であり、また聖師の冠句の師匠、度偏屈烏峰の号を持つ八木清之助が生まれています。十四歳で京都のある宮家に中間奉公することとなり、翌文久元

年（一八六一年）、公武合体で関東に降嫁する和宮の供として江戸へ下り、かつ一八六三年の七卿の都落ちの時も長州の田布施まで同行しています。

八木清之助は、江戸が東京となつた頃、故郷へ帰り、隣村から妻・小松をめとり、二女にも恵まれた。そのころから筆の行商を始めた。清之助が最初に中間奉公にあがつた宮家とは有栖川宮家でしょう。それだからこそ、皇女和宮の江戸行きのお供をしたと考えます。有栖川宮流書道は代々皇族に浸透していたから、筆の行商という商売は、その関係で始めたものに違いないと思います。出口禮子は推理します。筆の行商であれば、どこに行つても怪しまれず、宮家、華族、政府高官への出入りも自由だ。清之助が維新後も熾仁

親王から頼まれてさまざまな情報収集に当たっていたのでしよう。

八木清之助は、関東に降嫁する皇女和宮の供として江戸へ下つていますが、一八六一年頃の江戸での滞在先は、水戸藩の江戸邸である小石川藩邸でした。幕末の動乱期である当時、小石川藩邸に集まつた志士たちに、西郷隆盛、政治家として横井小楠、兵学者の佐久間象山、思想家の橋本左内などがいます。水戸藩が次の天皇に担ごうとした「玉」は有栖川宮熾仁親王であつたでしょう。

未来を見通した英邁な君主

孝明天皇

米国との通商条約（一八五八年）を調印した後、幕府は英仏などと安政五カ国条約を結びま

した。攘夷を主張し井伊直弼の政策を不服とする孝明天皇は、幕府、外様大名、御三卿らの協調による公武「合体」を要求しましたが、これを徳川齊昭らによる陰謀とみた井伊直弼は、大弾圧安政の大獄（一八五八年から五九年）を行い、即時攘夷を求める孝明天皇の要求を拒絶しました。その後、井伊直弼は、安政七年（一八六〇年）に水戸・薩摩浪士により暗殺されるわけです（桜田門外の変）。

ここが歴史家の伝えるところですが、攘夷を決然と主張した孝明天皇は、決して未来を見通せない暗愚な君主ではなく、未来を見通した英邁な君主でした。

孝明天皇は、皇国の神術」で

ある「切神神示」により、米国が日本を奪う仕組みをして攻めてくること、日米戦の分水

嶺が皇紀二千六百年、千九百四十年であることを見抜きました。皇紀千六百年に七十歳になる^スの拇印を持つ、ヨーワニという男が唯一、この問題を解決できると考え、ひたすら月の出を待ち続けました。ヨーワニとは出口王仁三郎聖師その人です。第二次世界大戦の開戦は、一九三九年、太平洋戦争の開戦は、皇紀二千六百年（西暦一九四一年）であり、その時代認識は刮目すべきものと考えます。孝明天皇の攘夷の主張は決して狂気ではなく、紫宸殿^{しんてん}において帝み^{みかど}ずからがなされた、切神神示^{きりがみしんじ}という占術を信じた結果でした。

尊皇攘夷論から開国

尊皇倒幕論へと転換

旭形亀太郎に話を戻しますと、安政年間一八五四年〜一

八五九年）、異国船が日本の辺境を窺い、日本の諸藩がその警備に急となり、土佐山内家が文久元年（一八六一年）四月に設置した、摂津国住吉郡中在地村・今在地村（現大阪市住吉区）の陣屋（住吉陣屋）に砲台を築くと、旭形亀太郎はそれを座視せず、自ら土佐藩に出入りし尽くし、松平土佐守土佐藩の第十六代最後の藩主、山内豊範（後に侯爵）に謁見を許され、木杯一個、その他数品を与えられました。山内豊範は一八五九年に藩主となりましたが、文久二年（一八六二年）に朝廷から京都警護の内勅を受けています。

土佐藩の坂本龍馬は、一八六二年一月に山口県、長州の萩を訪れて三月には土佐藩を脱藩しています。旭形が坂本龍馬と密議をもったことは記

されており、この前後に旭形亀太郎との接触があつたのでしようか。

文久二年（一八六二年）（二十一歳）大原左衛門督重徳が大内裏守衛となります。京都に生まれた公家、大原重徳は日米修好通商条約調印に反対し、謹慎を命じられますが、

文久二年（一八六二年）、薩摩藩の島津久光が藩兵を率いて

献策のために上洛すると、重徳は赦免され、岩倉具視の推薦で勅使として薩摩藩兵に警備されて江戸へ赴きます。そこで攘夷の実行や一橋慶喜を將軍後見職に任命することなどを老中の板倉勝静らに迫りこれを吞ませます（文久の改革）。大原重徳が大内裏の守衛となつたことをきつかけに、同年十二月、旭形亀太郎は同志を集め勤王力士隊を組織し、

宮中守衛の一部に任ずることを出願して文久三年（一八六三年）、勅許を受け、隊長として力士隊の総指揮を執り、日夜宮中へ奉仕することとなります。同年三月、天皇が攘夷を祈願する岩清水八幡行幸へ加わることを命じられます。

八月一八日の政変（七卿の都落ち）

和宮降嫁後、京都では尊皇攘夷派が勢いを得、孝明天皇の大和行幸（文久三年八月十三日実施）と攘夷親政を決定、これに対して文久三年（一八六三年）、八月八日未明、会津薩摩両藩は宮門を武力閉鎖し、中川宮朝彦をはじめとする公武合体派の公卿のみを参内させて朝議を一変させ、長州藩兵の御所警備の任を解くことに成功します。かくして長州



図四 薩長同盟を
結ばせた坂本龍馬

兵、尊皇攘夷派志士ら二千六百人は、三条実美ら尊皇攘夷派の七卿とともに、洛東妙法院に集まり、翌十九日朝、降り

しきる雨の伏見街道を南下、兵庫から海路、長州へ撤兵する。これが世に言う七卿落ちで、十七歳の八木清之助もここに同行していました。昭和七年当時、七卿落ちの唯一に生存者となりました。

七卿落ちの時、京都を追われた一行は長州で遊撃隊を組織した来島又兵衛らに連れられて田布施の大室家へ落ち着きました。そこで十二歳の大室寅之佑を見て一同喜び、か

わいがつて九月いつぱい滞在したといえます。一同は、大室寅之佑を、吉田松陰が擁立していた、大室家の血を引く大室虎助と理解したのではないのでしょうか。その虎助は不良力士の一人として慶応三年（一八六七年）十月二十九日、新選組沖田総司らにより殺害されたとされます。

出口禮子は記します。もちろんそこには十七歳の八木清之助もいたにちがいない。その間、長州藩の桂小五郎や三条実美ら公卿たちの世話をしながら、利発な清之助がなにを見たのか。寅之佑を「玉」として育て、南朝革命を成し遂げる謀略の密談などに気づかぬはずがない。

翌年、桂を逃がす手助けをしながら、清之助の心は揺れていたのではないか。彼らの

非情さ、長州殺しや軍団の恐ろしさも垣間見ていたのではないか。

八月一八日の政変で京都での地位を喪失した長州藩は、勢力挽回のため、藩主父子が無罪であることを明らかにし、七卿の赦免を願い出るがむなし、さらに元治元年（一八六四年）六月には池田屋で藩士

多数を殺されたため、武力による宮中制圧を策し、ついに三家老が兵を率いて上京、七月十九日、会津、薩摩藩と蛤御門で交戦するが敗北します。いわゆる禁門の変です。「天皇の黒幕と天岩戸の秘密」月間ムー」二〇〇四年十二月号）。

この禁門の変は「たまほこのひ可里」に詳しく出ていますので、ご参照ください。大阪城定番を務めた渡辺平左衛門の遺言によれば、慶応

二年十二月二十五日（一八六七年一月三十日）、孝明天皇は疱瘡も快癒し、岩倉具視の妹で、愛人の堀川紀子の邸を訪ねたが、伊藤博文が中二階の廁に忍びこみ、手洗いに立つた孝明天皇を床下から力で刺し、邸前の小川の水で刀と血みどろの腕を丁寧に洗い去ったと言う。

エルヴィン・フォン・ベルツは明治時代に日本に招かれたお雇い外国人（ドイツ人）の一人ですが、伊藤博文が有栖川宮熾仁親王の方を向き、「皇太子に生まれるのは、全く不運なことだ。生まれるが早いか、至るところで礼式の鎖にしば

られ、大きくなれば、側近者の吹く笛に踊らされねばならない」と言いながら、操り人形を糸で踊らせるような身振りをしたことを紹介しています

〔「ベルツの日記」〕。

「禁門」とは、禁裏きんりの御門ごもんの漢名で、蛤はまぐり御門ともいいます。が、天明の大火（一七八八年）の際、それまで閉じられていた門が初めて開放されたので、焼けて口を開ける蛤に例えられ名付けられました。

尊皇攘夷を掲げる長州藩は八月十八日の政変で京都を追放され、孝明天皇を長州陣営のものとするため京都に乗り込もうとする策が論じられました。薩摩藩士は長州兵の入京を阻止しようとし、禁裏御守衛総督一橋慶喜（徳川慶喜）は退兵を呼びかけましたが、京都蛤御門（京都



図五
有栖川宮熾仁親王

市上京区）付近で長州藩兵が、会津・桑名藩兵と衝突し、薩摩藩兵が援軍に駆けつけると敗退しました。幕府は長州藩を朝敵として第一次長州征伐を行いました。が、京都の市民、甲子兵燹図かろしびんげんずは長州の京都進軍の様子を絵にしたものです。

さて、次の「たまほこのひ可里」では禁門の変を物語の起点とする、出口王仁三郎聖師に關わる旭形龜太郎と孝明天皇の實話を紹介します。そこには数表、切り紙神示、孝明天皇の遺勅の由来も記されています。この内容こそが、神界の秘奥のひとつだと私は考えています。



図六 エルヴィン・フォン・ベルツ医師

そして、前年の八月十八日の政変前後が、「開化天皇の御神業」、世界統一の神業の近年の始まりであり、禁門の変以降、それが本格化するのだというところを『靈界物語』をひもとき、私は考えています。

明神あきのかみわれは小幡大明神なり。この度五六七の神世出現に際し、天津神国津神のよさしよしのまにまに、暫時ざんじ丹州と現はれ給ふ。汝が御靈、現幽神三界の探險を



図七 禁門の変 甲子兵燹図

命じ、神業に参加せしめよとの神勅しんたくなれば、三十五年の昔より、木の花姫と語らひて、汝が御靈を拝領し、我が氏の子として生れ出でしめたり。ゆめゆめ疑ふ事なかれ『高熊山』靈界物語』十九巻一章）。

三十五年前とは、これが高熊山の章であることからおわかりのように、明治三十一年（一八九八年）旧二月九日、聖師高熊山入山からみて三十五年前の一八六三年、八月十八日の政変頃から始まるということを示します。明治維新を含め、太平洋戦争に至る近代化と戦争の歴史、その型としての大本教事件など、それは世界統一に向けての「みるく神業」として神に仕組まれたものだったのでしょうか。

旭形龜太郎についての事績の続きは以降の号にご期待ください。

